

日本赤十字九州国際看護大学学術情報リポジトリ

タイトル	マンガを用いた日本語教育の視点と方法
著者	因 京子
掲載誌	韓日言語文化研究, 2(1) : pp 131-150.
発行年	2001.
版	publisher
URL	http://id.nii.ac.jp/1127/00000400/

<利用について>

- ・本リポジトリに登録されているコンテンツの著作権は、執筆者、出版社(学協会)などが有します。
- ・本リポジトリに登録されているコンテンツの利用については、著作権法に規定されている私的使用や引用などの範囲内で行ってください。
- ・著作権に規定されている私的使用や引用などの範囲を超える利用を行う場合には、著作権者の許諾を得てください。
- ・ただし、著作権者から著作権等管理事業者(学術著作権協会、日本著作出版権管理システムなど)に権利委託されているコンテンツの利用手続については各著作権等管理事業者に確認してください。

マンガを用いた日本語教育の視点と方法

因 京子

九州大学 留学生センター／比較社会文化学府

chinami@isc.kyushu-u.ac.jp

0.はじめに

「マンガのセリフの日本語は、他のいかなるメディアの日本語よりも、いきいきしていて町で普通の日本人がしゃべっている言葉に近い」（フレデリック・L・ショット、1998）と指摘される通り、マンガは、現代の話し言葉の宝庫であり、しかも、その発話の文脈が視覚的に示される。日本語学習教材として大きな可能性を秘めていると言える。しかし、いわゆるサブ・カルチャーの一つであるマンガを日本後教育の現場に主教材として用いることはまだ殆ど行なわれていず、従って、どのような作品を選び、どのように利用していけばよいかなど、具体的な教材化の方法論に関する議論も始まっていない。語学教育の方針が教養主義から実用重視へと大きく移る中、マンガを教材として用いるには、その目的を明確化し、方針をもって教材化の方法論を開発していかなければならない。

本稿では、マンガを日本語教育教材として用いる目的を考察し、教材化の一方法を提案する。最後に、筆者が2000年秋から行なっている女性・少女マンガ読解コースでの実践を基に、中間的なものではあるがその妥当性を検討し、今後の課題を述べる。マンガは、初級から上級まで使い方によってはどのレベルでも利用できるが、小説や新聞記事などと同じく日本語の母語話者を対象に書かれた「生教材」であるため、留学生対象の上級コースでの利用を前提に論考を進める。

1.上級日本語教育の目標とマンガ利用の方向

1-1 上級日本語教育の目標

「上級教育」の最終目標について、『日本語学習事典』の中には、次のような記述がある。

日本語の正しい発音、アクセント、イントネーション、仮名及び漢字二千字の読み書き能力、基本文型並びに文法、基本語彙を含む約六千語の語彙の習得と、それらを駆使して行う言語行動の能力、すなわち、一般的話題についての会話能力、新聞・雑誌・図書の読解能力、講演・テレビ・ラジオなどのニュース、教養番組、演劇などの理解能力それに音声・文字による表現能力等を目的とする (p. 638)。

一言で言えば、一般的言語活動全てに対応できる能力ということであり、これを「最終」目標とすることに異論を挟む余地はない。しかし、この最終目標に達するためのコースを設定するには、もう少し特定化した目標を立てる必要があるだろう。石田敏子(1995)には、上級レベルの教育目標として次のような記述がある。

学習者が自己の目的を日本語によって達成する段階。(中略)生教材を使用し、論文やレポートの書き方指導が行われる(p. 55、強調は筆者)

また、藤原・粉山(1997)は、このように述べる。

我々は、もう少し具体性を帯びた目標を持っている。その目標の一つは(中略)簡単に言えば「現代国内問題と、現代日本に関わる国際問題への認識と、それへの積極的関わり」ということである。(pp. 2-3、強調は筆者)。

こうした目標意識は、多くの日本語教育担当者に共有されているものであろう。実際、大学で提供されている上級コースは、次のように大別される。

①時事的な素材の読解・聴解、それに基づく発信活動

(素材例：新聞や雑誌の記事、評論、TVニュース)

②専門的な素材の読解・聴解、作成・発表

(素材例：論文・レポート、講義、研究発表など)

③文学的な素材の読解・聴解、それに基づく発信活動

(素材例：小説・随筆、TVドラマ)

①②が藤原・靱山、石田の述べるような目標意識に支えられていることは明らかである。両者とも、実用への応用可能性が見えやすく、実際的な目標であると言える。実用的能力の涵養が特に重視される昨今、こうしたコースの教材や方法論に関する議論は非常に盛んである。

しかしながら、③については、伝統的に最もよく行なわれてきたタイプのコースでありながら、その目的や方針について改めて検証されることは少なく、最近では日本語教育が将来取るべき方向として「文学からの自由」という主張さえ見られるようになった¹。マンガは、事実関係の明確な記述よりも人間の行動や内面の叙述や表現がなされるもので、文学的素材の一つである。そうである以上、マンガを用いるなら、文学的素材を語学コースの教材とする意義はどこにあるのかをもう一度確認してみる必要があるだろう。

文学的素材を語学教材として、文学を専攻としない学習者を対象に用いることの意義は、他の素材によっては扱いきれない言語活動や文化の側面を導入できることにあると考える。①や②で用いられる素材によって扱えない側面というのは、簡単に言えば、明解でない表現をも含む言語活動、即ち、文化的な前提を強く反映する言語表現や感性的な側面を反映する言語表現ということになるだろう。①、②においては徹底的に明解さが追求され、解釈や誤解の余地がないことが重視される。しかし、実際の言語活動においては、言われること以上に、文化的・社会的に共有される前提を基に、ほのめかされること、言われないこと、言語と行動を重ね合わせて理解されることが大きな意味を持つ。そうした事柄についての理解の検証や議論を行なうための素材として、文学的素材は語学教材として欠かせないものである。

しかしながら、語学教材として文学的素材を用いるなら、文学専攻の学生を対象とする場合とは異なる考慮があって然るべきで、作品選定にあたっては芸術性と共に実用性も考慮されなければならない。これまでの文学作品を用いるコースでは、文学コースの場合と同様に作品としての芸術性という観点から対象とする素材が選ばれたり²、或いは、読解技術養成のための材料として語彙数や分量、内容の理解しやすさが重視されていたり³で、語学の教材として文

学的素材を利用する視点が必ずしも明確になっていなかった。語学教材として用いるなら、文学的素材によらなければ伸ばすことが難しいような知識や技能に目標を定めて作品を選び、文学的素材の特徴を活かすような学習活動を提供すべきである。

マンガを用いる場合も、語学能力の伸張という明確な目的意識を持って作品を選び、マンガというメディアが最も貢献できるような学習活動を提案しなければならない。学習意欲を促進するためには、内容の優れた面白い作品を選択しなければならないのは当然であるが、芸術作品として一流の作品であってもそれだけで語学教材としても適当であることにはならない。例えば時代ものなど、学習者がモデルとして利用しにくいような言葉遣いが主になっている作品は一般向けコースの教材としては不適當であろう。学習活動も、文化的側面を含めて確実に理解し、活発に発信することを目標とすべきで、鑑賞の深さを求める必要はないだろう。

1-2 マンガの特性と学習目標

マンガの言語は、セリフが中心であり、状況依存性が強く含みのある表現が多い。話し言葉独特の特徴が大量に出現し、音声もかなり忠実に表記される一方、叙述や説明は少ないという特徴がある。こうした特徴を最大に利用するには、話し言葉の諸形態の観察、発話の背後にある前提や話し手の意図の解釈などを行なうことが適切である。

マンガの表現は、絵とセリフによっており、場面や展開は示されているが説明的叙述が少ない。従って、表現されるべき概念を指定して言語表現を求めるという発信活動を行なうことができる。概念を指定して表現を考案する活動としては翻訳・要約などがあるが、概念が言語によって与えられ、言語によって言語を引き出す活動であるため、どうしても発信される言語がはじめに与えられる言語に影響を受けてしまいがちである。マンガは、言葉によらずに概念を与えて表現を求めることができ、言語学习上非常に有利である。

マンガは、文学的素材であり、文化に支えられた内容を持っている。表現された主題や内容について、解釈したり自国の場合と比較したり、感想を述べた

りなど、積極的な発信活動を行なうことができる。特に、文学的素材として個別の人間関係を描いた作品が多くあり、人間関係についての考察を深めるというのは、マンガを有意義に利用できる面であると言えよう。

以上のような点から、マンガ読解コースの目標として次の3つをあげることができる。

- (a). 現代日本語、特に「話し言葉」について理解を深める。
- (b). 日本の社会と文化、特に人間関係を支える前提について理解を深める。
- (c). 日本語による表現力を向上させる。

2. マンガ読解コース：素材選択と学習活動

2-1 素材選択の条件

前節にあげた目標を達成するためには、以下の条件を考慮して作品を選択すべきであると考えられる。

- ① 主題について、考察や議論を発展させやすいもの：マンガの主題が何であれ、作品を一つの芸術作品と捉えて表現論的な立場から分析することは可能である。しかし、文学や美学の専攻でない学習者にとっては、身近に感じられる問題や興味や疑問を感じている現象などを描いた作品を読み、内容そのものに対して感想や批判を述べる方が、参加しやすく、活発な発信活動を行なうことができると思われる。従って、語学教材としてマンガ作品を選ぶ場合には、主題や内容を、作品としての完成度を左右する他の要因、即ち、表現手法の斬新さや絵の芸術性などにも増して重視すべきである。
- ② 現実的な設定のもの：時代劇や超現実のファンタジーなどの中に日本人の感性や価値観をよく表している作品があるのは事実であるが、学習者にとっては、現代社会の現実的な設定の作品の方が理解しやすいだけでなく、発話のモデルとしての直接的有用性を見いだせるので、教材として受け入れやすいと推測される。
- ③ 多様な人間関係を含むもの：話し言葉の状況依存性を観察するには、多様

な人間関係や場面を含んでいて、それがセリフに反映されている作品であることが必要である。

- ④一回の授業で区切りがつけられる分量のもの：技術的な問題として、長編を少しずつ読むよりも、一度で一つの内容を把握する方が学習者にとっては取り組み易いと推測される。読み切りの短篇作品として発表されたもの、一話完結式の連作などは、長さが大体揃っている。

2000年後期と2001年前期のコースについて実践ために選択した作品は、以下の通りである。

2000年後期：「現代社会で働く女性たちの諸相」

1. 『無印OL物語』 原作：群ようこ
6話の短編集から2話を選択。
2. 『4階のミズ桜子』 作：里中満智子
16話の連作から4話を選択。
3. 『9時から5時半まで』 作：逢坂みえこ
16話の連作から3話を選択。
4. 『うちのママが言うことには』 作：岩館真理子
19話の連作から2話を選択。
5. 「夏の夜の猿」 『つるばらつるばら』 作：大島弓子
6話の短編集から1話

上の作品はどれも、専門職や管理職の立場にある女性や一般のOLたちが主人公となっており、彼女たちの仕事や結婚に対する考え方、同僚や上司、後輩、恋人、家族との関係が描かれている。「現代社会で働く女性」という主題を選択したのは、女性の伝統的役割の変化は多くの国に見られる現象であるため、共通点や違いなどを論じやすいと考えたこと、また、「日本は女性の地位が低い」というのが留学生たちの日本社会に対する最も強い印象一つであるという報告⁵があり、こうした話題には留学生も関心があると考えたことによる。

作品形式は、短篇集と一話完結方式の連作作品を選んだ。始めは、マンガを読み慣れない学習者への導入のために、小説をマンガ化したものを選び、原作

とマンガとを一緒に与え、マンガの読み方とマンガの魅力を理解しやすいようにした。参考資料として、OLに関するエッセイや研究書を数点紹介した。

2001年前期：「名作短篇に見る日本社会」

1. 「霧笛」『ウは宇宙船のウ』原作：レイ・ブラッドベリ 作：萩尾望都
2. 「銀杏」原作：宮沢賢治 作：大島弓子
3. 「イグアナの娘」作：萩尾望都
4. 「思い出行灯」『雨柳堂夢咄』作：波津彬子
5. 「私の人形はよい人形」作：山岸涼子
6. 「名人二代 三遊亭圓左」『寄席芸人伝1』作：古谷三敏
7. 「半神」作：萩尾望都
8. 「夢虫・未草」作：大島弓子
9. 「乱切り人参」作：大島弓子

2001年前期は、コースのタイトルを「名作短篇マンガで読む日本社会」とし、マンガを語る時に必ず言及されるような有名作品を中心に、現代人の内面を掘り下げる内容のものを取り上げた。前の学期と同様、はじめは原作のあるものを取り上げた。1では、英語による原作とマンガ作品の両方を提供した。2では原作だけでなく宮沢賢治に関する基礎資料も提供した。作品の主題は、親子や家族の関係、伝統的家族形態の崩壊と再生、思春期期の内面の葛藤、日本人の教育観、超自然的現象の感じ方に反映された価値観、などである。

2-2 読解コースの学習活動計画

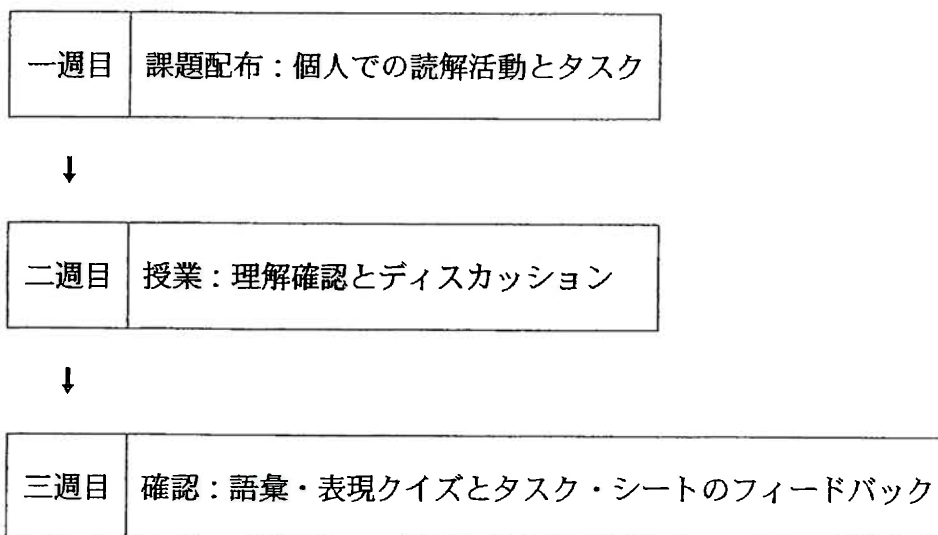
作品を読む作業は予習として学習者が個人で行なうことにし、授業時間はフィードバックと発信活動にあてる。これは、読解は基本的には個人の作業であることと、所要時間に大きな個人差があるためである。原則として毎週1作品を扱う。1つの作品についての作業の流れは下図のようになる。

個人作業を助け、個別の能力伸張を援助するための方策として、タスク・シートを提供する。タスク・シートは、言語的・文化的に重要ポイントに学習者の意識を向けさせる設問と、学習者が自分の能力に応じて対応できる発信促進

型の設問とを設ける。

学習の成果を学習者自身が検証し動機を刺激するための方策として、語彙・表現についてのクイズを提供する。クイズの検証する到達ラインを語彙と表現という基礎的で具体的な部分においたのは、全ての学習者にとって成果が実感できるようにするためである。

一作品についての作業の流れ



作成した補助教材

(a)タスク・シート（資料1参照）

分量：1作品にA4用紙2～4枚

内容：語句・表現についての説明・解釈を求める。

話し言葉に関する実態観察または分析を求める（例：特定の言語機能や規則を指定して該当する表現例をあげさせる、文体変化など言語事象を指定して動機づける規則を見つけさせる、など）

ストーリー展開や発言や行動の背景にある事情の記述を求める。

主題や内容についての記述または意見の記述を求める。

使用法：課題作品と共にその作品を扱う授業の一週間前に配布し、授業時に提出を求める。翌週、個人への対応をして返却すると共に、必要な

ことについてはクラス全体にフィードバックを行なう。

(b)語彙・表現クイズ (資料2参照)

分量：A4用紙1枚。所要時間約10分。

形式：主に選択形式

使用法：授業で扱った翌週に使用。

上の教材を作成する際に取り上げた言語表現の主な項目をあげる。

- ①表記に反映される音声変化：短縮、くずれ、強調のための長音化など
(例：なんつーか、言えるわきゃあない、ったく、おーし)
- ②擬音語／擬態語／擬感情語 (例：ぶるんぶるん、ひくひく、しゃきつ)
- ③流行語的表現 (例：時代を斬る、ふっきれる、ちんたらする)
- ④談話標識・主観副詞 (例：だって、だから、それが、まさか、せめて)
- ⑤連語関係 (例：なりゆきにまかせせる、言い掛りをつける、融通が利く)
- ⑥アイデンティティの表現 (例：男女の言葉、若者言葉、老人語、方言)
- ⑦場面や相手によるスピーチ・レベルの変化
- ⑧ポライトネスの実現形態：わきまえ表現と逸脱
- ⑨諸スピーチ・アクトの実現形態 (例：重大な過誤を謝る)
- ⑩古語・引用句 (例：余韻さめやらぬ、見ざる言わざる、色即是空)

3.実践経過

3-1 受講者

マンガ読解コースは、2000年後期はコース設置の宣伝が不足していたせいか3名の受講者しかなかったが、2001年前期には16名が第一回目の授業を試受講し、うち13名が登録しコースを終了した。

		身分	出身	滞日年数(歳)	専攻
2000	A	博士3年	タイ	7.5	日本語教育 コース終了後帰国

後期 女性 3	B	研究生	タイ	1	日本語教育		
	C	日本語日本文化研究生	韓国	7	(学部生)	幼少時に滞日	
2001 前期	B	研究生	タイ	1.5	日本語教育	前学期から継続	
	C	日本語日本文化研究生	韓国	7.5	(学部生)	前学期から継続日本語	
	D	日本文化研究生	ベルギー	0.5	(学部生)		
	E	短期留学生	韓国	0.5	(学部生)		
	F	研究生	韓国	2.5	法学		
	G	研究生	中国	1.0	日本文学		
	H	修士1年	ミャンマー	0	日本語教育		
	I	研究生	台湾	0.5	国際政治		
	J	修士1年	台湾	1.5	歴史		
	K	博士1年	韓国	4.0	日本語教育		
	L	研究生	中国	0.5	文化人類学		
	女性10 男性 3	M	研究生	韓国	0.5	歴史	
		N	博士1年	マレーシア	2.0	臨床心理学	

どの受講者も日常生活に不自由ないだけの日本語力は備えていたが、受講前の滞日期間はまちまちで、読解力にも会話の理解力にも、かなり差があった。このコースは上級として提供したものであるが、厳密に判定すれば中級レベルの学習者が少なからず含まれていたことになる⁴。

3-2 学習の実際

第一回目の授業では、コースの説明とマンガに関する概説を行なった。コースの目標、マンガを日本語学習にどう役立てるかについて話し、日本マンガ発展の要因、日本社会での認知のされ方、少女マンガの取り上げた主題、マンガ表現の代表的な技法などについて大まかな説明を行なった。

第2回目以降は、原則として一回に一つの作品を扱うことにし、各回の担当者を決めた。担当者は、毎回の授業で作品読解に入る前に作品の粗筋や見所、

主題についての自分の意見などを口頭で発表する。その発表の後、分担して作品を「音読」し、文脈や表記に合ったイントネーションを想起できているか、表現のニュアンスの理解しているかなどの点を確認していった。音読の途中、あるいは終了後に、内容や表現、マンガの技法などについて質問や議論を行なった。

授業時にタスク・シートを提出させ、翌週に返却した。対応の内容は、
①理解の明かな誤りを訂正し、必要な説明を加える、
②学習者の表現上の明かな誤りを訂正し、必要な説明を加える、
③学習者の質問に答える、
④学習者の解釈や感想に対して、担当者の感想を述べる（ほめる、共感する、別の解釈を述べる、など）
の4つである。学習者の意欲を向上させるためには訂正するより反応する方が大切だと考え、努めて④を行なった。

受講者の個人差への対応は、二つの方法で行なった。一つは、タスク・シートの提出を任意とし、また、全ての質問に答えていなくても提出してよいことにした。もう一つは、受講者には対象作品の収録された本（多くは文庫本）を貸し出して余力のある者には対象作品以外の全作品を読むように促し、他の作品に関する質問や感想などをタスク・シートと共に提出すれば対応した。

3-3 実施結果：目標は妥当であるか

マンガ読解コースを行なうにあたって、次のような目標を設定した。

- (a). 現代日本語、特に「話し言葉」について理解を深める。
- (b). 日本の社会と文化、特に人間関係を支える前提について、理解を深める。
- (c). 日本語による表現力を向上させる。

この目標が妥当なものであるかどうかを、学習者の示した意欲と学習状況の観察に基づいて検証する。はじめに、このコースに対する学習者の意欲を、出席率とタスク・シートの提出率と授業への参加態度から観察する。

まず出席率は、2000年後期は受講者全員が全回出席、2001年前期は、6名が

全回出席、4名が欠席1回、3名が2回であった。欠席回数には学会出席など避けられない事情のものも含まれており、出席率は高かったと判断できる。

タスク・シートの提出率は、提出が義務ではなかったにもかかわらずかなり高かった。少々遅れて提出した場合もあるが、10回分のシートを全て提出した者が5名、8回分提出が4名、5回提出が2名である。2名だけは1、2回提出するに留まった（うち1名は能力が中級レベルの学習者で、もう1名は上級の力がある。学習者のレベルと提出頻度には関連がないように思われる）。興味深いのは、コースの初期に提出していなかった学習者がコースが進むにつれて提出するようになったことである。マンガへの取り組み方に徐々に慣れて余裕ができたからかもしれない。

授業への参加態度は、どの学習者も熱心で発言の要求にも積極的に応じた。日本語力が高い学習者数名は堰を切ったように質問したり発言したりし、時として発言機会をコントロールする必要があった。しかし、質問ができることが彼らの学習の刺激になっていることは確かである。コースの最後に口頭発表を課し、その内容に基づくレポートは任意提出としておいたが、口頭発表は全員が行ない、レポートは5名が提出した。

以上のことから、マンガを教材として行なった今回の授業内容は、学習者の関心と意欲を引き出し積極的な学習活動を促すことに成功したと判断できる。

次に、タスク・シートへの取り組み方や学習者の質問やコメントから、学習状況の分析を試みる。タスク・シートでは、話し言葉の特徴と言葉の背景にある心理や状況の理解が困難であろうと予想される部分を焦点を絞って設問を行なった。辞書を引いて前後を読めばほぼ理解できる表現について単純な形で回答する設問もあれば、文脈に示される特殊な状況を把握しなければ理解できないものについての設問、及び、事情説明や見解叙述のためにある程度まとまった量の日本語を産出することを課す設問もある。

表現に関する設問には、殆どの学習者が非常に熱心に反応してくれた。男女差や上品か乱暴か、歓迎しているか嫌がっているかなど、日本語のニュアンスに関して多くの学習者が非常に強い関心を示した。表記された形の話し言葉に接し、言葉のニュアンスや状況について考察する機会を持つことは、話し言葉

の理解に苦しむことがまだある学習者ばかりでなく、日本滞在が長く大きな問題が殆どなくなった学習者にとっても有意義であったと判断できる。日本滞在8年の学習者A、小学生時代を日本で過ごし母語話者と変わらない運用力を持つ学習者Bなども、誤解や理解の浅さに気付いたと述べたことが一再ならずあった。「タスク・シートがなければ、ぼおっと読みとぼしてしまったかもしれない。読んだときはわからないことはないと思ったが、シートの質問に答えようと思うと難しかったということがよくあった」という発言があり、意識化の具体的手がかりを提供することが大切であると改めて認識させられた。

内容に関する設問に対する回答も概ね熱心な反応が見られ、シートの割り当てられた欄に回答が細かい字でびっしり書き込まれていることが多かったが、設問内容によって回答の熱意に少しムラがあった。非常に熱心に書いている者がある一方、文化的な差異などから筋の運びや主人公の行動に共感できない⁵学習者は、回答しないことがある。また、学習者個人の性格と能力によって、非常に掘り下げた見解を書こうとする者と、表面的な記述に留まる者とがあるが、日本語を用いてまとまった量の産出をしていたことを評価すべきだろう。概ね余力のある学習者の方が熱心に回答した。担当者は、どの記述にもなるべく担当者の感想や反応を書くように努めた。2001年前期の受講者たちに作品の内容に興味を覚えたかどうか尋ねてみたところ、全員が作品の内容の深さに驚きマンガに対する印象を一新したと答えた。最も人気があったのは、母娘関係を描いた「イグアナの娘」で、母の突然死の後の父娘関係を描いた「乱切り人參」、離婚を子供の立場から捉えた「夢虫・未草」も支持を集めた。「半神」は、抽象的でわかりにくいものはやめてくれと言った者もあったが、これを最も印象に残る作品と言った者もあった。

以上のことをまとめると、話し言葉の表現に関するタスクは殆どの学習者にとって直接的な有益性を感じさせて熱心な学習活動を促進し、知識の増大に直接に貢献したことが観察される。主題についてのタスクは、学習者によって作品によって参加度に違いがあるが、能力の高い学習者にチャレンジを与えること、掘り下げた内容の発信を促すことに貢献した。

マンガ読解コースの実践はまだ二期を終了したばかりで、成果について信頼

性のある結論を出す段階ではないが、以上のように、学習者の意欲的な学習を引き出し、実のある学習活動が行なえたことが観察され、目標としてあげた項目の方向性は保持するに足るものであると考える。

4.今後の課題：マンガという豊穡な分野を利用していくには

マンガという素材が日本語教育に大きく貢献できることは、報告した実践からも疑いようがない。今後効果的な利用を進めていく上での課題として、次の3点をあげたい。

(1)適切な作品の選定

(2)教育手段の考案

(3)学習者の意識への対応

このうち、(1)(2)は、何を用いるにしても当然行なうべきことであるが、(3)はマンガがサブ・カルチャーであるが故の特殊な事項である。2001年前期のコース終了時に学習者たちの全員が「非常に面白かった」「難しかったがいろいろわかった」とコースを肯定的に評価してくれたのであるが、同時にほぼ全員が口にしたのは、「こんなに深い内容の作品があるとは思わなかった」ということである。その他にも、「留学生仲間から、よくそんなもの読んでる暇があるね、と言われた」「国ではマンガを読んだことがなかった」「国ではマンガを読むのは教育のない人だけ」「日本のマンガは性的な内容か暴力的な内容のものばかりだと思ってた」「少女マンガなんか愛と恋ばかりの、子供のものと思っていた」「マンガが教材だと知らなかったからこのコースに来た」など、ある程度予想はしていたものの、聊か驚くばかりにマンガに対する意識は芳しくない。実際にマンガに触れた学習者はそのよさに気付くが、マンガが教材として広く受容されるためには、マンガが芸術としての鑑賞に堪える表現手段でありすぐれた作品が多いことを、学術的に裏付けていく努力が必要である。

註

- 1 加藤秀俊(2000) pp.17-19
- 2 中級後半から星新一、上級では松本清張、夏目漱石、森鷗外、安部公房などが使われている。
- 3 渡辺亜子(2001)
- 4 上級コースの在籍者に中級レベルの者が交じるのは、通常の状態であると言える。力が不十分な者も参加でき、且つ高い力を持つ者にとってもチャレンジが与えられるよう設定を考える必要がある。
- 5 例えば、「乱切り人参」において、父親が母と娘に「離婚したい」と打ち明ける場面、「イグアナの娘」において母親が娘に厳しいことばを投げ付ける場面などは、学習者によっては自国では「タブー」とされている事柄であるため強い違和感を覚えて、理解できないとのことである。

引用文献

- 石田敏子(1995)『日本語教授法』大修館書店
- 加藤秀俊(2000)「四つの自由化」国際交流基金日本語国際センター編『日本語の開国』、TBSブリタニカ
- ショット、フレデリック・L(1998)『ニッポンマンガ論』マール社
- 日本語教育学会(1982)『日本語教育事典』大修館書店
- 藤原雅憲・初山洋介編(1997)『上級日本語教育の方法』凡人社
- 渡辺亜子(2001)「上級レベルの文学作品速読の授業計画と教室活動」.千葉大学留学生センター紀要第7号

《資料1》

「おもかげ行灯」『雨柳堂夢咄』（波津彬子） 年 月 日 名前_____

1.理解が難しかった言葉を抜き出してください。

2.理解が難しかった場面はどこですか。

3.この作品の中に、好きなことば／語句／場面がありましたか。

.....

語句／表現

1.次の①～⑪は、どういう意味／感じですか。簡単に説明してください。

①おもかげ（面影）

②御在寺ですか（p.164）（cf. 御在宅ですか）

③供養する（p.165）：仏や死者の霊（この場合は、物に宿っていると思われる何ものかの霊）に、お供えものやお経をあげて、霊が満足して幸せになるようにすること。

④内緒にする（p.167）

⑤いたずらに（p.169）

⑥願をかける（p.169）：神や仏に願い事をする。特に、ある特定の事を熱心に願うこと。

⑦大事な（p.171）

⑧禍禍しい（p.171）

⑨備わったもの（p.172）

⑩私なりに（p.173）：力や考えが足りないかもしれないが、私としては最大限の努力で。

⑪留守をまかされる（p.179）

2.次の①～④は、どういう状況／感情を示していますか。

①ぼろぼろ（p.166）

②きゃー（p.169）

③すかつ（p.181）

④じたじた（p.185）（cf. じたばた）

3.この作品の中で、自分、及び話している相手を指すために使われている表現を全て抜き出してください。誰が誰について、どういう表現を使っていますか。「おまえ」という表現の感じ（ニュアンス）について、観察したことを書いてください。

4.蓮と芳春の年齢は多分17,8歳と12,3歳ぐらいだと考えられます。この二人は、相手に対してどのような丁寧度の言葉を使っていますか。言葉遣いから、お互いに対するどのような態度が観察できますか。

5.和尚さんの言葉の中の、他の人とは違う特徴を持つ言葉遣いを抜き出してください。それらの表現は、どんな雰囲気を作り出していますか。

.....
1.蓮がこの寺に時々来るのは、何のためですか。

2.芳春は、どういう経緯でこの寺に来て、この寺で何をしているのですか。

3.蓮は、どうして寺に泊めてくれと頼んだのでしょうか。また、それを和尚様に内緒にしてくれるように頼んだのは、なぜでしょうか。(pp. 166-67)

4. 蓮が持ってきた「行灯」は、どんな物ですか。この寺に持ってきたのは、この行灯が邪悪なものだからなのですか。

5. (pp. 183-4)で描かれている場面を、言葉で叙述してください。

6. 幼い男の子（子狸）は、どうしてこの寺に来ているのですか。

7. 芳春は、理想的な人格を備えた人物になるべき少年として描かれていると考えられますが、どのような性格が与えられていますか。具体的にあげてください。

8. 人でないものが人の姿を取って表われる話は日本には数多くあります。（『雨柳堂夢咄』其の三「月の花影」「寒月の笛」なども見てください）あなたの国ではどうですか。それらに対する感じ方は、日本とあなたの国とで違いがありますか。

《資料2》

「名人二代」語彙チェッククイズ 月 日 名前_____

1. () に下のAから適当な語句を入れてください。 _____にはBから適当な動詞を選んで、文脈に合う形にして入れてください。

①オリンピックに出場するために、きびしい練習を_____きた。

②親はこどもに () 甘くなって、わがママを_____しまう。

③さん生は、息子を自分の弟子にしたら、息子が_____と思ったので、他の落語家に_____。

④客：小圓左の噺は、 () 面白くないなあ。

客：そうだねえ。 () 真打ちの芸とは思えないねえ。

⑤弟子：下手な噺だなあ。きいちゃ_____よ。あんなに下手では、 () 師匠も、_____わけにはいかないだろう。

師匠：いやあ、 () よかったよ。

息子：そうかい、おとつあん。

弟子： () どういうつもりなんだろう。

⑥お金に目が_____、秘密をもらしてしまった。

A

いったい	さすがに	ちっとも	どうやら	いくら
どうしても	なかなか	ぜったい	とても	なんだか

B

つむ	ほめる	いる	つぶれる	ほめる	けなす
する	あまやかす	あまったれる	たのむ	くらむ	

2. { . . } から、最もよいものを選んでください。

①さん生さんの {口ぐせ・口だし・口どめ} じゃないが、我が子は谷へ落とさなければならぬ。

②息子に名前を継がせるかわりに私はやめるのだから、誰にも {口ぐせ・口だし・口どめ} はさせないよ。

③皆小圓左の芸を {不良・不満・不実} に思っていたが、親に {配慮・心配・遠慮} して、 {文句・せりふ・話} が言えなかった。

Ways and Viewpoints in Teaching Japanese using MANGA

Center for Foreign Students/
Graduate school of culture and society,
Kyushu University
CHINAMI, Kyoko

MANGA is a treasure of the current speech, and moreover the context of the utterance can be shown visually. Thus there is much possibility that it could be suitable material for learning Japanese Language. MANGA is, however, seldom seen to be used as chief materials for learning Japanese because it is labeled as what is called Sub-culture. In these days when many people learning a foreign language aim for more practical skills, the purpose for using MANGA should be made clear and some sophisticated methodology should be established how to make teaching materials out of MANGA.

In this paper I will inquire into the aim of using MANGA as the materials for teaching Japanese, and propose one of the ways to make teaching materials out of MANGA. Lastly, basing on the activities in 'Reading female/girls' comics' course, which I began last autumn, I will examine the validity of it (though the conclusion is not final), and I will discuss the problems which are assumed to be solved in the future.